

言先寺道名所圖書

三

			二九一七七	和書門類
		二三七	二九一七七	
五册	一册	架	函	號

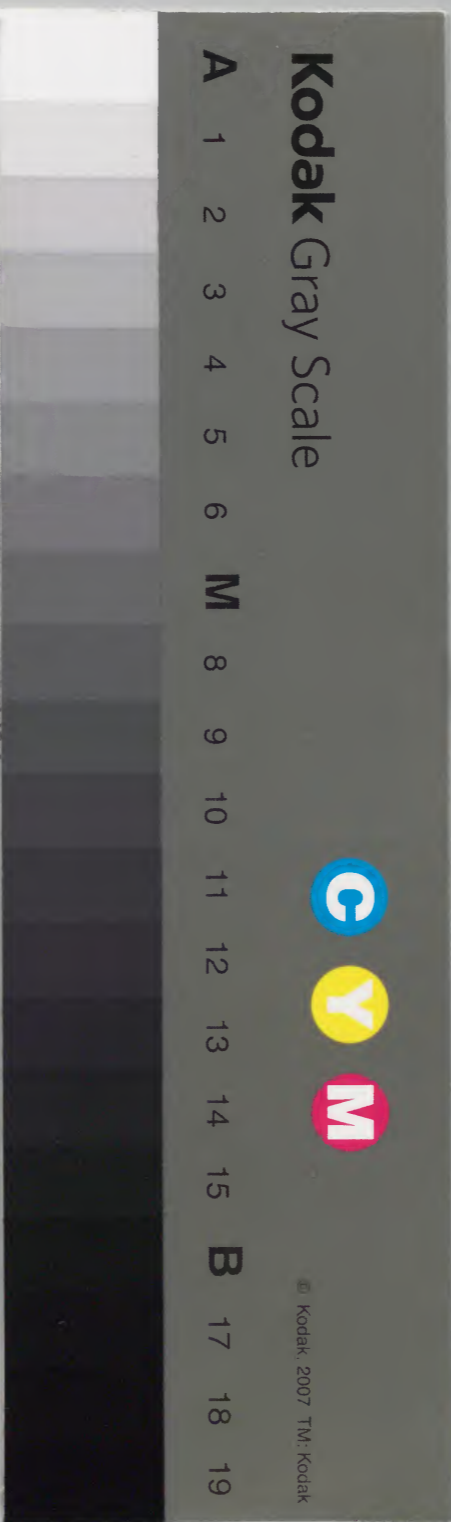
庫文閣内				
二九一七	二九一七	五	二九一七	和書
函	册	架	號	類

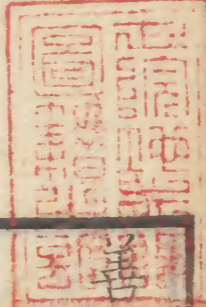
内閣文庫	
番號	和 29177
冊數	5 (3)
函號	267 86

地八六

内一〇九二號

本





善光寺道名所圖會卷之三

○善光寺驛

北國街道

美和神社

時九の塚

如來

昆沙門堂

二王門

御供所

年神宮

高雄塚

四宜樓

寬慶寺

定念佛

辨財天

鐘樓

骨堂

經藏

諸神塚

秋葉宮

兄弟塚

山王塚

六地藏

萬善堂

別當大勸進

大本願

牛頭天王

大佛

寺中四十六坊

阿闍梨池

制札

御霧屋

攝待所

社家

大岑山

番所

大門町

朝日山

熊野社

月葦叢者說

諏訪社

閻浮檀金

本尊如來出現

百濟王說

内一〇九五三號

本朝來現	聖德太子說	本多善光說	難波掘江
伊奈郡寺建立	檀越略系	堂内年賀式	光明常燈
戒壇廻	汰然上人舊跡	親鸞聖人旧蹟	笹字名號
善光寺四號	鏡の御影	年中行事	寺領
元録造營録	善光寺紀行	荊萱堂	血脉頂戴
ゆんじ薬師	山吹の瀨	長原温泉	善光寺七社
同七橋	同七清水	同七井	同七塚
栗田刑部城趾	横山信濃城跡	塩沢温泉	桂山古城
飯繩里宮	御供所	仁科氏宅	飯繩奥岳
駒返	千日屋舖跡	篋屋	飯砂
天狗の遊所	飯繩原	劔ヶ峯	

善光寺

のがえんバトマ
 登り丹波葛(一里あり)越後の方(下るふ)善光寺より荒町(一里
 半)礼(二里半)柏原(一里)野尻(一里)越後の関川(一里半)足との
 順路七里あり野尻小湖水あり其流也越後の今町の濱小て海へ入
 此川と関川とつた野尻の湖水も流つたと同く氷凍つめたる其よ
 人馬とも往來せり但飯沼と八雲りて巖壁の初ハ風荒く浪高く
 氷結じ早春に氷りて始て凍まり湖中に岩あり辨財天と安む
 按るに牟礼より柏原野尻越後の関川二膳関山二本木荒井とと
 中山八宿といふ又善光寺ハ北國街道の宿驛小して本名水内
 郡柳原庄芋井郷長野村なり如來此所小遷座の後地名もも
 猶よく惣名善光寺と稱する成べし

善光寺より東一伊勢町新町渡橋と渡り横山村の次三輪村の南
 脇小美和神社と路ハ神名記云美和神社
水内郡小八座の一也社家ハ高き伊豫ちとつ三輪村ハ北國
街道の順路
 十五丁やどと云三輪村の北脇小時丸の塚とて古墳あり善光寺七塚の
其一あり

三輪村
美和神社
神名帳
水舟郡小八座
の其一なり



春江補畫

○定額山善光寺

水内郡柳原の庄芋井卿
長野村の靈場なり

天智天皇三年甲子草創也むく天台宗はく三井寺持なり
其後真言宗と成く高野山に属しきと寛永年中東叡山
に属しき再び天台宗に帰次

本堂南向高サ十丈二重屋根撞本造柱の数百三十六本垂木の数法華
經に文字の数法華經文字の数ハおよそ
六万九千三百八十四字ナリ小准ふかり四方に上段有リ正面
の板舗小大なる香臺と置く香爐の右股に太鼓あり左股小花瓶なり
松を八る足と親鸞聖人淨手生の松といふなり毎月朔日小
排代ナリ
本尊閻浮檀金阿彌陀如來と本堂西庇の間に安置し御厨司四方に
戸帳あり應安二年申三月三日と記き其外を綾錦金襴等
みく七重の包むといふ秘佛ゆて毎朝の閑扉といふを戸帳扉一重
閑くのまはり中の間より東へかき善光善祐彌生の前と安置
はくといふ善光を中央小ね事故あるまはす

塩尻

善光寺本尊ハ一光三軀ニ是ヲ新小模鑄シテ尾張國熱田乃
僧定尊法師靈夢によつて建久六年五月十五日中尊ハ
鑄成シ同く六月二十八日小菩薩と鑄キタルカニ赤色ニ尊
別軀レテ又画像ハ伊豆國走湯山の僧淨蓮上人兼久
三年の春告いよつて御戸と開キ尊像ヲ持シテ自画像セリ
同年五月佛工越前の法橋海繩鑄シテ模シヤク

按小定尊法師ハ九歳の時法華と誦シテ夫より三十二年ハ法
華と誦スルニ凡四万八千九百部ト云其後又法華一字毎
ニ拜シ弥陀ノ名号一遍ヲ唱シテ一千部小満川實ニ建久六年
四月六日其功畢マシ其年ハ十一月六日善光寺如来ノ告ニ感得
シ方九千人ノ慈施ヲ勸縁シテ金銅ノ尊像ヲ模鑄ト云
抑善光寺ハ本尊ヲ生身の阿弥陀如来ト称スル所以ヲ聞侍リ
其むハ中天竺中々大聖釈迦牟尼佛長者月蓋乃慳貪ナル代

定額山善光寺

寺中之圖



其



其 二
 河井 乃
 浄光 月之輪
 又之せは

不便小思召一方便と以て西方の聖主阿弥陀如来と影向るるに
 其誓願を説き其奇瑞と示現し長者が寂愛れ娘をとり免五
 百人乃眷属より國中の諸民に難病等を平愈たりしめ給ひ
 うを月益長者夢の覺ると如く殆隨喜の涙にむせび信仰の
 思ひ肝小銘と忽ち内外清浄の本心ふ立降り釈尊の許
 小糸りやきやう驚くい今れ三尊の清形を摸し奉り我室内に
 安置し甚重れ芳恩を報ぐ奉らん然と共吾九丈の力小争ら
 りるに奉らむ我が志願と哀愍し給へと有り仏長者に告給り善
 哉く殊勝甚しとくへ爾浮檀金を以て鑄摸し真躰を此土小止
 めなるとも此金の尋常れ金より倍龍宮にある所と然に神通を
 羅漢等とて争う求るとして得人目連を以て其使と色龍文塔小求め
 志むべしと宣り一舎の大流是を崗く彼竜宮城と申其行程八万
 由旬の境に其上漫く坐る夕谿の底波浪烈く假令神通第一たり





印鼓尊者
 以神通到
 龜宮城得
 閣浮檀金



とも争う至るべしやとほおゆれり目連忽ち机舎に於て悟り進出て
曰吾昔時佛の音詳に遠く他方に響き給ふと計知らんが為に
遙の仏土を飛越て光明盤世界に到り是とててたうふ何ぞ竜宮
城よあつらんやと易れ事ぬあつとて扱ふれ秘意を兼り其傍
立く左の足ゆく大林精舎の北乃椽を踏むと見え右の足ゆく龍
宮城小飛行より一會の大衆肝を消し密感するより外はるれかく目
連尊者竜宮城小到り其形勢を見るに四面小築地あり銀の門を建
内ゆる敷多れ小絶その威をあり守護しきり外乃陣の
四方に四節此景氣と作す玉の薨金に柱瑠璃の扉水晶の壁に玉
の簾をけ絲竹を調悠々と蘭蕙乃薰り紛々として門を守護そ
れ眷属に手長足長とのふ者有り其力金剛力士の如く嚴く衛
まらば容易入らるるはこれ目連神通をのりて虚空より
入らんや思ふ所に内より赤衣の官人出ると是と竜宮城なり身乃

如き人倫の境界あり後早く本土に帰るべき人とのふ其の如く目
連尊者佛勅に趣とのへるを彼者聞くと扱ふ世尊の御使者なるぞ
やと上へ言上中とて有るはとて急に内に入り件の旨
を上奏しを行を龍王聞るとひたあはれ是とて南殿小請り
と様ぐの供養と演へ其後龍王出會く尊者に對面ありて
目連佛勅と伸て曰西方極樂世界より化現來臨乃如來志御
形を摸し奉りて末代の衆生を利益せん事と預ふとてに縛
鼻し奉りて龍宮城の珍寶商浮檀金小撈るる金瓶一盃のよ
とら多是なり絲がらりと此金を佛小送りて人々其旨を
ぞ伸給ひて竜王うち聞るとあはれいと此金を中らに繰り
け土にむひく第一の重寶なりとこれ土ある田畠を耕き事
るけとば穀あるもの如く園小桑たるとは縮布の類ひを績まら
業成たるとは唯安樂に渡るものども此金の徳あり衣食れ

此波うり足く之し此事如くもい佛の財金と成とも送
参りきほるいえと我叶ひしはと宣へて同連関くおりの
やう吾佛前にわひく勅を受殊ふ大衆れ中よりは使者に接を
たごしむね帰らん事本意たると業あり神力を現し
奪ひ取らんを氣やされとさつと思ひぬつと解し容
易なるさやめやあむと何とされお給ふ言よせと釈迦佛乃
因位のまうと我語り給ひたる 中畧 龍王是を聞て誠小理小依
しきる氣色やく斯ややく尊者怒りてさるる色依に隨ひ
此紫金を捧申さんまらるる容易くあせんも尋常の軽ふ
責れ如くや思ひ給へる龍宮第一の重宝なるよと演く奇
異の譽小預らん為かくい申せしは所ふ此金さくばいそ仏勅を
蒙らんたなくば尊者の来臨もさるる具る仏勅具は資料
あり争ねしと申さるる其後座を起宝塔の扉と開き圖浮

檀金二十七百兩と手自取物と恭く捧奉らる同連紫金を受
取此功德廣大なるよと讚歎して刹那小毘舍離國に皈り圖浮檀金
と世尊に奉りて多ひる世尊歎き給へる月蓋長者も悦び受取たり
かくて彼金を玉の鉢に盛て臺上に備置彼三尊と請ひ奉りて三尊
忽光明を放ちて照しる人又釋尊光明をたらしと云れ光明ゆ
圖浮檀金と照しる人不思議なるれば金忽やつと沸きさあ
成にきつ干時釈迦牟尼仏三昧禪定に入りて給ひ清身に積歩
給へる功德六度十婆羅密十力四無所畏三十二相八十種好内外
一切乃功徳を現し由りて然と禪定より出さるるい合に向
印し給へる忽三尊の聖容小違つと金色乃佛體と變りて
我者我を良あめと本佛歩より給ひ新仏の頂を三つと接た
はへ新仏又二度禮し給ひ二仏同く虚空に飛より住ま
よ其高きより七多我樹の如く俱小光明を放ち神變不測也

粧ひを現し西方に飛行すひさし月蓋遙小拜し奉り夢をたう
に申するに新佛を依り奉るに南閻浮提の本尊となりなり未永
劫の衆生に至る迄利益と蒙りしんが為之乎我願を空しく本土に
を帰るべきと歎き悲しむるに虚空よりあはるる法身となりて汝
暫く待べし本仏を送り奉るに必歸来るべしと告せしむるにやがて飛
皈らせ給ひ西乃樓門の上に立ちまうるに長者歡喜あはるるに
如來を請り入せ奉りて金銀七寶を鏤るるは大伽藍を建
立し五百人の比丘を扶持し六八弘誓の願力をあはき不斷礼
拜するに是併大聖釈尊に厚恩なりかあはるるにやがてかほ
奇特の有るに長者を初其外乃眷屬總々毘舍衛國の万民とや
く々大林精舎に詣りて善提の道に入るるに我朝に出現し
給ひ善光寺如來や申し此御佛に法事なり

正身如來重廿六貫三百目 前立二尊一佛重廿八百七十目宛

斯く月蓋長者と同名同姓ありて七代迄跡を續五百歳の間
榮華に榮え樂り其後此願ゆへ一天萬葉の國王と成り世に恐る
者なく如來を安んじたり隨值供給し奉りんと願し其次の生
れ於ては百濟國聖明王便月蓋長者の再誕是偏に如來不可思議
此佛力なり本尊天竺國ふりて衆生と利益し給ひ其年月五
百年の間よりまうる百濟國に飛行あり是即月蓋長者今も彼
國乃大王と生るる所以なり如來は百濟國の禁闕小望し空中に
ゆきゆく光明を放ち給へ玉殿庭上趨きまうるに見たり清くの
巨下上下の官人このまうると怪しめ天子を此に御覽し
驚き給ひ幸限りぬ如來光明の内より顯るるにあはるるに法華
を告給ふなり其の驚きを吾はまは四十八願の主西方極樂に教主
たり左右の侍者の救世に大悲衆生護念の薩埵なり抑聖明王の前
身むく天竺に存く月蓋長者なり一時無二乃信心を以て我

如来
百濟園乃
禁闕小出現
聖明王の前身
と示すなりと云



春江楠画

極樂淨土より吾を請ふるを切らるるよつて吾又應化して長者并
に眷屬と初其外群生と濟度と是偏小我奉願不取正竟乃誓ひ
ゆへなり此功德に依り長者の願望れ如く帝位小備るる志も十
善の榮華に誇り酌無常と志と三寶小歸る志を失ひとあり
亦惡果此業とかりけ後まゝ三途の故郷に歸りて永劫の苦みを交
む事見らふ志のひも昔れ機縁はさげら夜小濟度利益とんが為今
此處小未現せりや告りて佛拜聖明王此耳いふと忽宿習開發して
信仰の心肝小銘と感涙袖小餘と庭上ふらり玉の冠を地よつて悲愧懺
悔し虚空と礼し給へりて玉殿をあららひ佛間と稱し如来に
請し奉らば三尊れ如来微笑の佛眸を迴らし空中より紫雲に乗
殿中に入移りて異香四方に薫り光明耀きつらりて万億の燈火を一
夜あららるる異なり御門を初后宮女諸臣百官渴仰恭敬し奉
り感信の誓志と鳴きあがりて三業の精誅を勵し六時の勤行

怠り給仕恭敬し終ひたり如来百濟國に御化導年月をうら
く一千百十二年や成りける其間の帝王九九代とを演えり
然る小九代の天子を推明王と申さる如来は帝に告りてやう吾らの
土此流生と機縁既小熟しねと今より他方にある其所とつて是より
東海をおとく一の國土あり大日本國と号し彼國小到り群類を海
渡りて告りて佛門を初后妃百官下り下りて関傳へり御
つとととて熱しむ事限りたりと他邦小往り給へり示
現度たかれ千人の僧徒造り外陣えり出り奉りて餘り
佛名錢とるりてとて内陣に入るとせり長光中らり始
如來此國小到り時雲に乗りて來りて終へり度もまゝ空をうけ
り日本に渡りて飛行自在の佛をい何とて失たると
も凡夫の力あり及ごり暫くも留り奉る夏を眞の知見を憚り
又佛慮も計りて只日本に渡りてなりとすをればみねり

此議小同トける法門中は法別を歎き然し多々ありていづれ佛乃法
告がれん力及をば法を下して日本に送り奉て給ふ法船をこそ用
意し給ひたは七寶を以て飾り金玉の檀を拵へ錦繡の褥寶蓋
をさう千人に傍如來を法興に遷し奉れば大臣百官供奉
法を法門太子后妃侍女の法方々玉に簾を挑げ法名法と
とすろのひる其外國中其賤男女小至る迄巷にを依り法別
を惜む悲む舞四方に響くわうり斯く法船小移らせぬ水主
梶取擲擲を取海上に漕出せし如來に附奉日本への勅使
事々西部姫氏達率奴利致契思率多利致行等其外二人の傍
あり日本に添えし一舟云

純金一光三尊阿弥陀仏像長一尺五寸同脇士
觀世音菩薩得大勢至菩薩像各長一尺同奉副
經論幡蓋臣聞万法中佛法最善也諸道之中佛法
道最上也是法難解難入也周公孔子猶不知是

法能生無量福德果報乃至成辦無上菩提遠自
五天竺泊三韓依教奉行天皇陛下宣修行故渡
傳帝國佛之所化我法流東故附使貢獻恒信行
者也貢上如右已上

斯く法船と出しは法門后妃ありての侍女を具し給ひ日
頃も翠帳内に住むいづ路頭みは出目せざれども如來の法別を
然し人の見る目を愧ぢり法海乃ち意に出させぬい宣ひたるを
我等五障は雲厚くとも三尊の光小照さる奉らむ事今生の
樂と悦びし以後といふ業障の雲霧を拂ひ淨土に月法詠
奉らん娑婆に別を翻し淨土の再會縁となさしめぬと
自ら淨衣の瑞瑤と採り如來に供養し奉り法船小繼り乗移り
のふりを見し其倭海中に飛入り大臣百官とて驚きをれども力なく只忙然とて向
憧如來に別奉るなりみよ又法后あり別を奉りせし誦妄執



如来百濟國
 より日本に
 渡りて来り

春江補畫

乃雲に迷ひたり我等とも曰く浄土に導かれんと稱名の多めり共
小續つゝ海に飛入りて理りゆをまこと哀なり於て入水の人二百五十
餘人とて関し忽紫雲海上に變遷來り聖主來迎し引接しゆふぞ
有難き異香四方に薫り音樂響に跡を極樂往生の相を現せり
人関人も詞も及びざる感涙ふ沈みきりり色は國中れ貴賤日月の光を
失ひ只闇路と測れ心地して寂き入滅の首に異なり後斯く漸く
波浪と凌ぎ飛が如くに馳ゆれ島々浦々うら過く事故なく大日本
國根州難波津ふ半夜の鐘と俱に着るふが大光明と放らるる四方れ
山々忽金色の光とぞ成ぬる

抑我朝小生身れ如來來迎あり人皇三十代欽明天皇れ御宇
十二年壬申十月十三日なり其比の内裏へ大和國山部郡斯岐乃金
刺の宮や中奉命去りて百濟國に官使并に二人の僧如來來寶蓋
と昇り内裏乃庭上に居る推明王の書翰を持ぎ其よりと卷て則

廠聞小達しをれ御門諸臣と召せり百濟國より渡き所の佛像經卷
受納せりや否を問ふは此時一同に卷しきる外國より渡き所
佛像敬く納めりて其故を彼國より日本を窺ふ事度く
然きと神國の威風小恐怖して近侍を能く今此像を渡き事
日本と呪咀し調伏する為なる人速小返りあつ然る人と卷し
去るに蘇我大臣稻日宿禰奏して曰く是國も道有る徳なり道有る
に恥あり異國の輩彼令着は日本に野心をしとさむと今も惡意
以翻し心け靈像を渡し佛經を送る条備に日本に威徳小あは
やま我朝も神國なり神明の本地を以てて貴敬せば可なりあな
還さきに於て小智愚昧れ國なりと侮り吾國を窺りも必定成
る尤尊信しるべき形像ありと御門関召し蘇我大臣小勅
り異國に使者に佛像安置供養の儀式を向し先給ひぬ天皇志
くれ由を廠聞はし詔をて小墾田乃佛殿をあつる如來遷

い多し香花燈明をい多珍物寶物を供養し奉り禮拝恭敬し
はひなるあり異國の使者に引出物を賜て返答をある人二僧を曹
濟賑を給りきれば使者を百濟國に送歸りて其後我大長
の宅以佛所代新小構へ如來を過し奉り金銀珠玉并莊嚴を盡し七
寶志檀錦の帳花綉帳蓋小至るまで善美を盡せり或時如來乃
眉間より光明をさるら十方を照し多ひたれば禁闕の殿舎宮女曹
司局に至るまで輝れりりて実小生身れ佛神をば露鶴不
思議教くしく値遇し奉り輩利益を蒙らざるをば御代を
穩あり十九年れ春秋を我送て送る然れ小庚寅に當る今年
如何なるゆへに在り所に疫癘流行して災賊男女親より子と
ききて是をるるみ其外牛馬古畜此隅なく市中山野小いりて
終止時なり依り河内宸襟を悩し多ひ群臣眉代鬢むるをりり
内裏には大臣公卿其外諸官と召さる天下安全ありしむを評議

とぞ閑し召らる其時物部遠許志大連卷同中さるる信は疫癘
を致し小異國より不思議の仏像と傳しける御崇敬ある故なり
ゆゑ異なる像を本朝に傳し奉り其例を所なり依り我朝乃天神地
祇吳國の人形と崇り神祇の威を失ひるを怒り陰陽れ氣順環
勢に病病の悪氣と變り國民を悩しる奈明かりま吾朝を伊
弉諾伊弉册の尊より一氏も異姓を混せ居皆し正し此苗裔なり
然るに異國れ人形を供養し尊重し給り我朝の神祇の崇り
國土の人民小到るを争り吳人の形像と捨り崇り神祇を敬り
給りしと憚りなく申されきば法郷一回此議小同し卷同中さる
をれを河内もいり閑る中河内所實小志と信し多ひ評議既
小究りて勿辭りも生身れ如來を失ひるを多き小成小ける鈔有
しむる遠許志大臣下知りて河内抄津より鑄物師數多召集り猛
火盛に吹立て勿辭りも如來を取て其中投入なり七日七夜吹



春江補畫

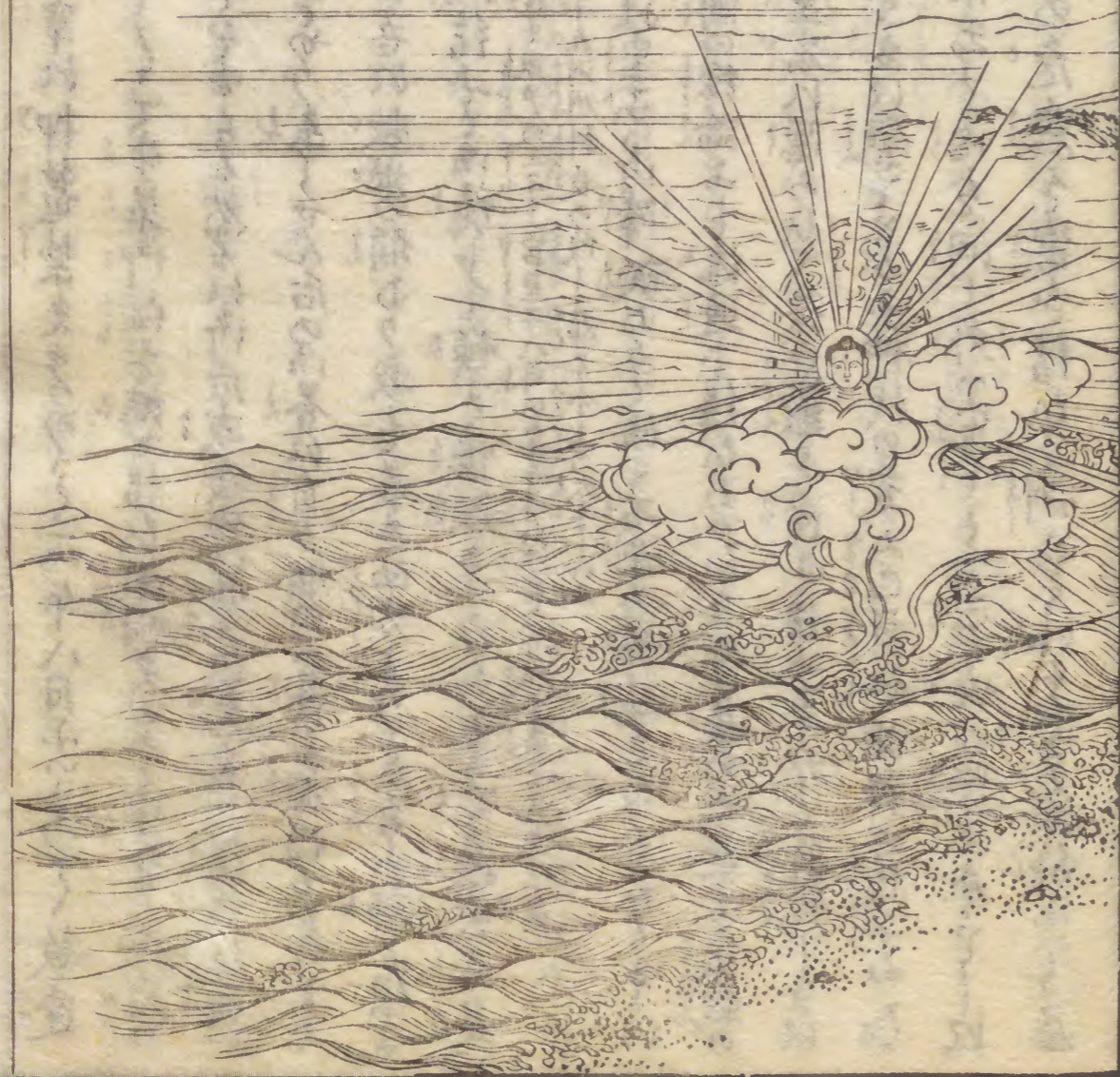


皇太子
戸皇子
守屋連小
襲きたまふ時
椋の栗樹の
危急と援を
奉りとるり

ども如來の御身の色も變らず新もそねむる見聞の輩ありきと
あやしく身れ毛と立舌を巻て我思きたる大臣も今興る穴怖ら
り水底に捨てて難波の堀江に捨たれ其後世間にはまの希
有多かりに翌年辛卯の初夏小欽明天皇崩御より遠許志大臣
も疾病に床に薨りぬむろ旗度波羅門も悪言を以て替時佛を
謗り替小よつて無間地獄に墮きり假令給中摸と本に刻むも以神
なり崇むる中我義の叔敏達天皇御即位乃後御不豫より上下万
民怪しむ教を以てつる博士を召て考へさせよふに奏して曰御
惱の事前帝は御代は焼失ひも不佛像の崇りる事と中以御門
を初奉る諸卿大に驚給ひ申て勅使と難波堀江に送り給ひ
さむぐれ懺悔をせし申さる其時如來水面に現れ光明耀きされ
ば急死此より奏聞し中が内裏に結し入りぬぐの供養をな
し給ふる昔も過りて御惱を平ふるを給へば貴佛悦

びの色も萬歳を我唱へたる爰又弓削大連守屋大臣
遠許志の太^子情思案を運じ泰内の折り奏する先帝の御代に
此人形と礼しぬと西土表へ人民病悩もて永く失ひ給ふ所
今又先君は例小宵に給ひ尊崇し給ふと御不孝とやさん奉朝
れ諸神怒をなし給ふ事必定あらん失ひ給ふにまをあたと也
帝又此議を信し給ひ志すべ汝が奏する如く先帝の御儀小隨ひ
吾朝の神祇を敬し奉らんと詔有る守屋大に悦び某が為しも敵ぞ
くそく河内紀伊國より多人を寄せ斧鉞を以て打碎るを
まを元盤に碎り鋸を折て併解と解と損し給ひ貴佛悦然とて
物より者なり守屋今力盡き大息突く假令十日千夜打て焼とを
換滅とせり只元の如く堀江に沈めして黄金れ妙神佛具返水底
沈免金軸の経巻を彼の上より漂ひたる又曰假令佛像を失ひゆる元
附ちりたる僧を安穩に坐方を重く併法法知むべとて一捕入

本田善光難波堀
 江を通り時水
 中より光と放ち
 けられ善光と走り
 むとせり松樹聲
 ありて善光を呼
 止めりし三尊佛
 阿彌と昔の機
 縁を示しぬちふ
 夫より生公信後
 供奉しなりしと
 則善光寺本尊一
 光三尊仏是なり



て法服を剥ぎ穿に押籠禁免多かるく丙午八月小つろく敏達
天皇崩御すくして帝弟沖位を継せ給ひ用明天皇と申なる沖后ハ
穴太郎皇女と申る然るに沖后或夜の夢に氣高き僧侶枕上に
在る后の胎内を切り棄てせん后の胎内自胎内甚く穢れるものと
仰き後ハ傍の曰吾に救世の願あり我とあると西方よりと宮より輝と傳ふ
后此沖口に飛入給ふと後後トて懐妊すくくちる聖徳太子是
胎内に十一月在る麻戸の王子上宮皇子八耳の皇子等は名あり推古帝二十八年二月
非也
按る小麻戸此皇子ハ沖降誕ありて後ハ不測の奇瑞さるくからの中に
も初めて異國の經論書を流通し給ひあるは守屋の大連と交戦の
折柄も掠の靈木に隠りて其危難を適と給ふ事など所怪しき
似たりといふも爰に譬とる小神代の首大己貴命諸神の精ふあし
給ひ一時嵐出く内を洞く外へ穿くとて己が穴ハ隠し奉りて
よりて燒野の危急を禦と給ひ一例も比とるや終小は守屋

と誅戮し給ひ難波堀江小如来と云言書をかり其佛教を受用
し給ひより承く本朝に其道知まり君臣上下信用務むとす
事なく衆生化益れ奉立給ふ事ハ大なる功績ありけや是
併り皇大神乃御小應トたむんば争々神國小跡
と垂給ひや爰よりくおと我母ハ神祇を尊崇するに次
尤恭敬し奉るべし靈像と作がまきり
人皇三十四代推古天皇十年壬卯に當る四月上旬に頃信濃國本田
善光といふ者都の勢事終り此序中そ名所舊蹟を見巡りか
道に便おはるる難波堀江にこりてけるが何れか水の中より
光りて見えなればありきうらむやと走り過むとる後より
夢ありくや善光怖々事たると我ら去る生世世汝小機
縁ありて安置とすく阿鉢陀併り汝静小きけ首の因縁
を示さん我汝を待り年久しや宮より沖夢殊勝小吳香薰ト

々々善光たりし信作の宿縁開發して不審ながら申々るは
走々其過忝れありと示し結へとれり則告曰

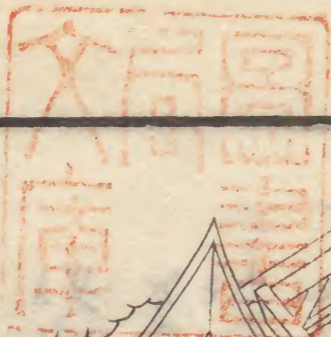
昔在天竺名月蓋 奉請如来致恭敬
次在百濟名聖明 我飛彼國被安置
今在日本名善光 三國一躰同檀那
我今尋汝來此處 早仕宿縁皈敬我
生世護念汝 如影隨形不暫離
故我隨汝往東國 欲令利益惡衆生

如来重て宣く我汝を待ん為度の水屑と俱ふ年月をふり之
九十六年 時既小至さうり汝我を具して奉國を下るべし汝と一所に在
の向なり 況生と利益まじと伴勅実あわると善光隨喜の涙よく
とく思ふやう此如来靈吳天下にくと那し殊小上宮太子は歸敬
あはばとて王命と窺ひく後悦び勇む如来と負まんとて吾奉法よそ
下る情万法一如の道理と按に迷へば則日本信州の棲茅屋土生乃

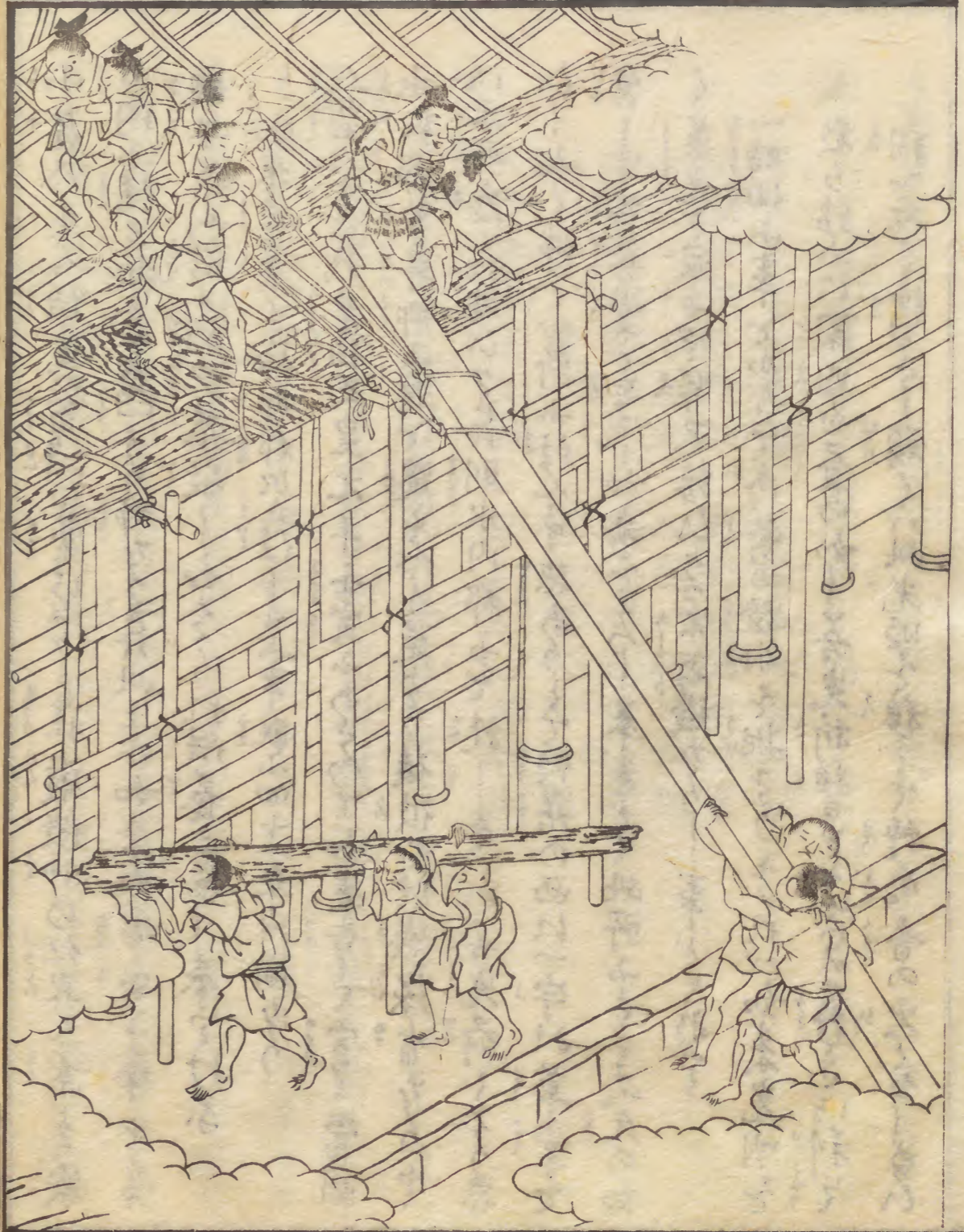
小屋乃土人悟き百濟の臺はるがう莊嚴微妙の仁界之素より家
の内小清き物とて白より外なるまば此上小如来を安置し奉りけふ
親子三人偈々朝夕恭敬しをさうりれ供養をさし奉りけふ

如来當國ゆく伊那郡に止位し奉り既小四十二年其間なり
人皇三十六代皇極天皇元年壬寅小あゝりて如来告く宣く當國
水内郡茅井郷小我と遷とて是より後彼所は機縁有なりや
示現度く及び色色則水内郡あぞ遷し奉り善光前より思
ひし如く併と一所小住んる恐ありとて住居の西に一字れ草堂を
營て本善堂と号し如来をさうり奉り此所ゆく又元の如
く善光が家あぞ歸り結ひたる不思議なりし事ごとく形す

一時由小車とかきて清前の燈明を批ざりきれば如来光明を
放ら結へん家内白昼の如し善光祈誓やうるは五之誓とて利益
親と以て演ざり願くは此光明を移して燈明香の火とすめい



和漢三才圖會
 欽明天皇十二年本尊如來自
 百濟渡來而未信推古天皇
 元年草創建寺於伊奈郡麻
 績里宇治村



本代の傳人なるを利益衆生の結縁誠に功徳計りてことごとく
 光明即佛の頂に之を又眉間に光を故給ふ小香の油
 小どのり照させ給ふぞ不測なる如来偈を唱へて
 一度見常燈 永離三惡道

何況挑香油 決定生極樂

是即如来れ心光めて三有の衆生乃迷闇を照して結るはを
 之の結り文なりけしは如来寶前の燈明を眉間の白毫より
 出る光明にて救百歳を經とも更ふ備ふ事如く今猶佛茶
 へのやれ結りての火是なり

其後如来御堂建立れ事々佛門の法願とて繁然御造營なり
 抑材木と輓に至りてさぐれ不思議なり諸天善神親向りて
 誰をもぬく材木自ら踊り歩む如く彼靈場少く集りて
 金堂を造るに之を弥勒并工匠と現して是を造り給ひ修造を終り

て後忽彌勒井と名を天に昇らせ給ひける彼井造營の間とみ
 終る所に一間をまつらひ今れ世小至る迄弥勒の間と我申す今此
 善光寺の日本の邊地めて凡丈薄地乃草創といふも井の法事と
 以て建給へば魔障あつとて却て守護神と成るは事故なり成統
 寺と號しける如来を供養し奉る檀那畧系

△若麻績東人善光

信州水内郡本多の人
 本多武彦善田

二代 若麻績善佐作留
 七代 若麻績高倚

十代 廣道
 十一代 利成 寛膳部
 十二代 高雄 正常
 十三代 時國
 十四代 爲重 称夫部
 十五代 女子豊範 夫部麻司妻

三 諸身 九代 東世
 四 意比 六代 大國
 五 常世
 此皆若麻尔ノ姓ニ正常ノ女子家ヲ続ギ如来像ヲ供奉シテ其子
 相統セリ其中二十代ノ若麻尔氏ニ然共称号夫部ヲ用ヒシ

○長谷豐範 若麻尔正常之女 丈部ノ安平 丈部ノ麻司男正常ノ外孫

天代 時海 知里 三十一代 知門 高節 知隆
時郡 知歲 知門 高節 知隆

右檀越交名次第塩尻見くろ氏姓と相續人々如件 縁起同文

和漢三才圖會

欽明天皇十三年本尊如來自百濟國渡來而味信推古天皇十年草創建寺於伊奈郡麻績里宇沼村而後皇極天皇元年依佛勅移水內郡建立本願主名本多善光因以為寺號慶長二年七月秀吉公以本尊奉入於洛之大佛殿然佛不悅而有奇祟故同八月復奉還天台大勸進

聖德太子為欽明用明二帝及守屋之徒菩提於清涼殿七晝夜令行念佛三昧而遣小野臣好古於善光寺奉一通書其文曰

名號七日稱揚已 仰願本師彌陀尊 以斯為報廣大恩 助我濟度常護念

八月十五日

勝鬘上

本師善光如來御前

好古乘黑駒馳至以本田善光献上之善光副硯紙入之戶帳中則有返翰其文曰

一日稱揚無恩留 何況七日大功德 我待衆生心無間 汝能濟度豈不護 待賀彌天恨止告皆入爾何於何都天急加佐留覽

八月十八日善光

上宮太子御返報

右歌載風雅集曰歎止可告蓋太子與如來徃復之書凡三度七言二句或四句八句而其第二次法興元世丁年辛巳十二月十五日調使者名第二次同二年壬午八月十三日調使者黑木其返翰藏法隆寺寶庫而勅封緘無嘗見之者神佛靈異之有無也不堪論

按埃囊抄等小史載之詳焉竊以年號雖有孝德帝天化号中絶後天武帝太寶以來相續故為之

古今著聞集

年號始然則推古帝有法興元世之年号乎所味
聞也且此時文章未備而七言詩肇於大津皇子
四十一代天又聖德太子薨去推古帝二十九年辛
巳二月也所謂支干皆當薨去之後也疑件文章
及年月等後人添妄說者乎

鎌倉右大將上洛の時天王寺へ参りて色とりける其時鳥羽の宮別當
あくるんせんとて御對面ありとて幕下下されりるに於朝が一
期りゆき一度はしき善光寺の伴狹く奉るるに二きび
甚うらちて定印あわれりゆに決乃とひら来迎の
中あくあつていふは公者より印相定まり終りぬ
侍て少どもゆきしとては公者より印相定まり終りぬ
と只人あつてさるるを文作らるるにせり

欽明天皇此御宇より孝德天皇の御代近年教百二年の間に宮
殿小戸帳をかゝる如來ありて拜され終ひし然るに白雉五
甲寅九年に當り如來告せ給へり宮殿を營り我と納り前
に戸帳とたると其故のゆかりは不善造惡の輩恣に我前小

寄る臭氣をとりてとて我是を厭ひてとて却て遂罪と成
て皆惡趣小墮するなり依之て驚き恐と急ぎ宮殿を造り戸帳
を掛秘伴とたり勢給へ是の始なり

按るに善光寺に佛閣あり回祿小乃有為の相を示し終ると
いれ如來の薰徳を以て天下の衆生志と屬し再建禮を成
就せり其古に舊記小見之を今縁起小載る所と見るに高倉院乃
御宇治承三年己亥三月廿四日己の刻小あつて悉く炎上なり
そのち龜山院の御宇文永五年三月十四日夜半に炎上是九十二年
同なり又四十八年以後花園院の御宇正和二年三月二十二日酉の刻炎
上なり其後又八十八年と過後光嚴院の御宇應安三年四月三日夜
寅の刻炎上又後小松院の御宇應永三十四年丁未三月六日午乃刻東
の門より火發りて堂塔一字も不殘燒滅又後土御門院の御宇文明年間も
炎上ありかく度これ火災おも一光三尊の靈躰或々忽然とて横山



正月朔日夕の時
 如来堂にんぎょうしく
 年賀の
 規式きしき



難波の小謡なみののこぎん
 うらたて三度
 一花ひらくとて天下
 三般大徳やれやよろし
 代乃なほ安全とめてゝめは

乃堂に飛移す或ハ清厨子のらるる猛火文ふ至シ錦帳の内光昭赫
燐々して恙なく或ハ紫雲小葉して金堂を移ア移トて生身忠
佛祥たすずして幸ある奇特のあまきや作ぐべし信むを
如來百濟國より來朝あつて聖主十三代打續る御崇敬よく或
と宮中に安坐し終ひし事をもりしむる其歷代

△欽明天皇 人皇二十代
在位三十二年

△敏達天皇 三十一代
在位四年

△用明天皇 三十二代
在位二年

△崇峻天皇 三十三代
在位五年

△推古天皇 三十四代
在位三十八年

△舒明天皇 三十五代
在位十二年

△皇極天皇 三十六代
在位三年

△孝德天皇 三十七代
在位十年

△齊明天皇 三十八代
在位七年

△天智天皇 三十九代
在位十年

△天武天皇 四十代
在位五年

△持統天皇 四十一代
在位十年

△文武天皇 四十二代
在位十二年

以上縁起 日本書紀 天智天皇三年三月以百濟王善光王等以居難波

○光明常燈 在厨司の宝前小はり不消の燈明といふ其くは若光の

願ふよりくは來の光明をよりいひし今世に至る

○後堂 中々

○外陣 小疊九百疊程と敷き糸詣の貴賤の所を神狹を毎夜通夜の

人影 一○向拜の前中左右に寶鏡三ツ有○外陣小定番乃臺あり

其脇の花瓶に松を差そこれ親鸞を人ほ生生の松といふ 毎月朔日に

又堂よりて東西小鐘と掲より外中に見得ぬ物なり常は撞らやなく

開帳の砌ふ用之○戒壇廻りより有須弥壇乃東脇に入口より措子

かく下り内陣の下と三度巡る元口へ出る實に闇夜れ如く俗向小相

傳ふ放辟邪侈なる人といふ所なくと為り又怪異ありといふ未詳

○御年宮 本堂の後より 此宮の昔八幡社ありしが今横沢町に遷してその跡之

毎年極月二の申れ夜丑の刻規式之○鐘樓 本堂の東小者 ○昆沙門堂 東二丁

あり別當所の 別業爰小者 ○納骨堂 本堂の乾 此邊本堂の裏通るべく諸家乃石碑

多し○經藏 本堂の西小者 高廿四丈六寸二分横六間三尺二分四方なり

○淨供所 本堂の 西小者 如來法華經 十六善神 西五九月十五日大般若其外

○秋葉宮 西に有 經卷の 辨才天祠 小北 山王塚 諸神塚 本堂前左右 此立石是なり ○萬善堂

別當所の北ふつて 東向の道場なり ○忠信次信の五輪二並び立 三門の内西例小あり古代の

○鍍燈籠石燈籠の支相馬彈正少弼室石川播磨守平岡美濃守室等と

始て諸國より奉納する所れ數九二百三十餘基終夜其光たる時を

一以上山門の内なり 三門（上）の日は五月十五日十六日二季は彼岸三日
十五日四月八日七月十月十五日十六日十月十五日十五日なり

○三門高六丈六尺七寸桁行十一間一尺二寸深間四間二尺四寸文珠四天王を

安き○是より二王門までと誌に○大勸進 西側ふづり 別當所なり東叡山

比叡山より住職なり○手水鉢 三門外別當所
の門前にあり ○天王宮 列當所の
南にあり 例祭

六月十三日十四日祇園會あり山車渡り夜々芝居狂言あり其外古雅な

れ祈り物數多ありて賑ひ夥しく諸國より系信多し是と善光寺の

祭禮といふなり○六地藏 ○大佛 山門下東
側小堂に ○釋迦堂 世尊院
ふあり 本尊涅槃

槃の釈迦如来より天延年中越後國古多瀆より出現の像なり

○駒返橋 ○寛慶寺 山門の
あまほ かの寺々慈覺大師に建立しゆく浄土宗と

時の鐘あり ○定念併堂 宝林院ふる響堂といは寺に東都新吉原の遊女
高雄石研あり十三年目毎小回向ありと云

○地藏菩薩 今仏より西側ふあり
昔の本堂此處にあり ○阿闍梨池 阿闍梨院に
の裏ふあり 昔皇圓阿闍梨地身と

成て此他小住るといふ詳なる傳といふと聞ざ

按ふ小遠州橋が他いむ比叡山肥後の阿闍梨源皇といふる智藏と三塔

無雙の學者なり法然上人の師ありては源光寺と賜て徳空と名乗りたるに

源皇はよく業を以て併道の淵底我一世の修行やく悟りまらざるに孫

勒の生母を俟く三會に曉を初まるといふもそれまで命を保つ龍身

小あくはし是小住て才子等と諸國ふ下し龍の棲所を見せむるに東

圓の使者帰るまらんと申す遠江圓笠原莊小櫻が池といふあり南を

蒼海洋とて北に青山嶺とあり其間ふ池水を湛へて淵底側を

かし且澄澄とて龍蛇乃棲る靈地なりと申し阿闍梨是を聞て

一夜座禪して一滴の水を掌中にて揺り雨風を起し雲小葉ト櫻が

池小列を入定し給ひるといふ波瀾さるるや驟雨車軸乃とく雷電

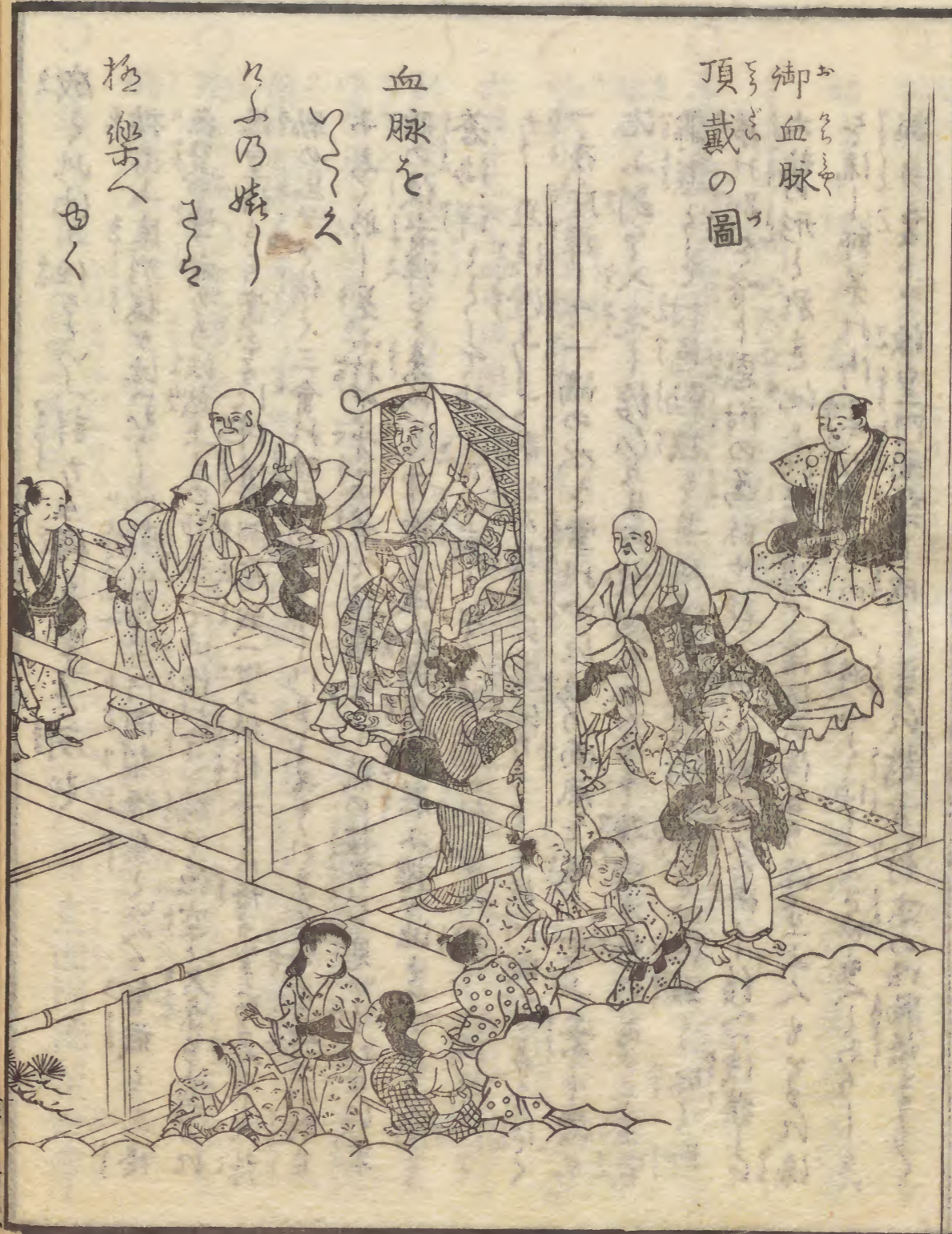
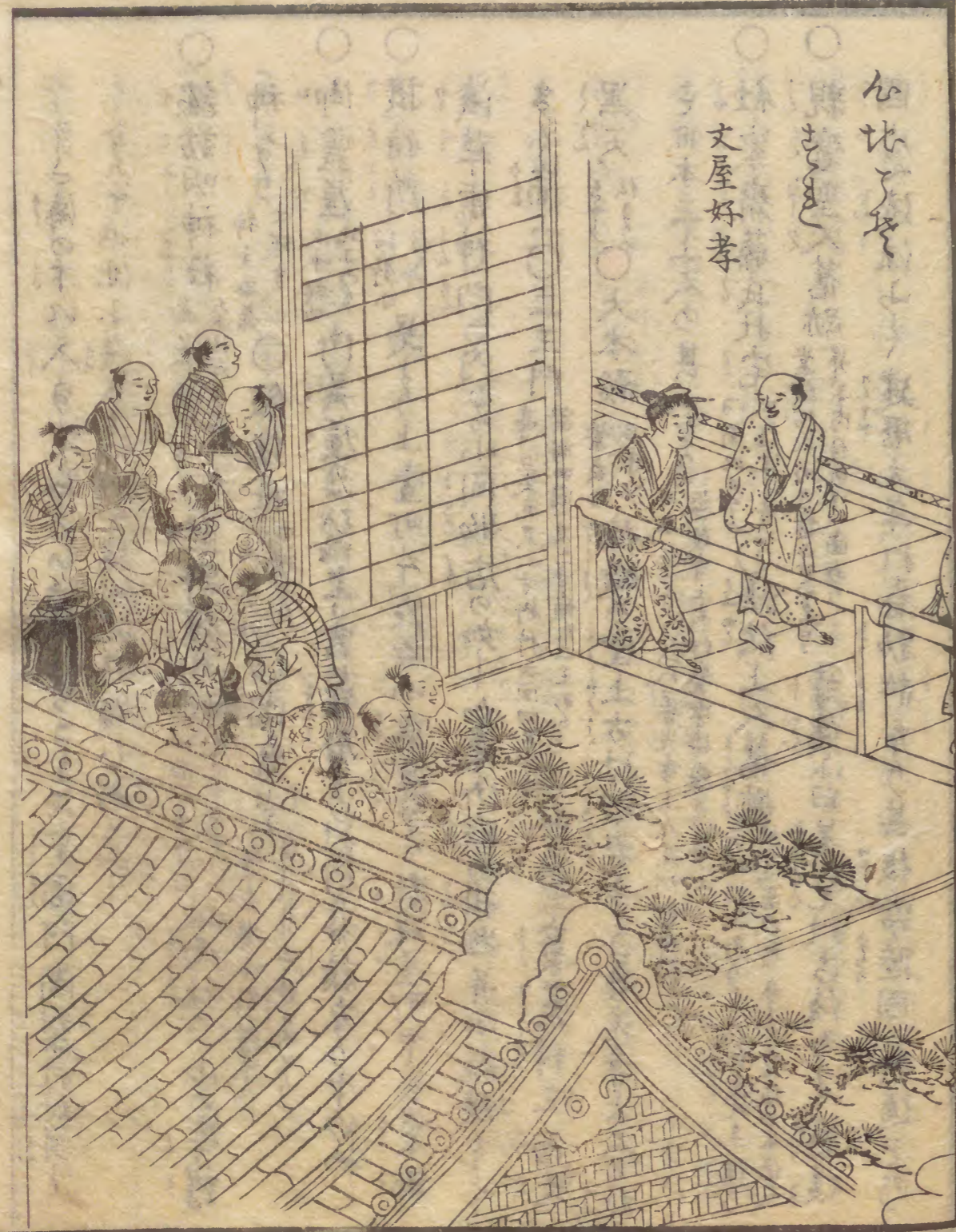
霹靂とて村邑動揺る其後源光上人は圓小赴き池頭より師

弟に別を尋ね恩謝の為弥陀經を誦し姓名念佛し給ひ浅猿に

大龍の形と云ふ池上に頭を揚て落涙の侍なり源光上人もその源

を流し師弟は術藝あり本の人許やくゆえこそ多しありと云ふ

龍身とて源皇阿闍梨と成くまは越方行末の古物語なりと



まづ清の下に入るよとやひ侍人侍らざる皇圓阿闍梨地力と
なりては池小住るといふも標が池乃類ひ形なり

○諏訪明神社 石の東に在り 奉祀九月十四日 ○熊野権現社 四西に在り 奉祀九月十五日 此兩社一山の守護

神あり 神主麻藤 下総守 ○飯繩社 一山の火防 ○閻魔堂 奉衣婆小野道風作 南王八先年焼失なり

○御靈屋 大木願の北にあり 街吳屋及び近年宮の官府より此街普請たりや

○摂待所 旧行小 是より上壹町斗左右小店連了を数珠屋町や東都

浅草雷神門の内なる小間物店の如く如来街影の掛物并小教珠を

多く高よ○二王門 高三丈九尺二寸桁行六間四尺六寸 梁間四間一尺二寸南に二王あり 北に三寶荒神三面大

黒天 仏より ○大本願 紫衣の尼寺 住職の堂上方に姫君や善光寺上人と称

を日本三上人の其一たり 日本三上人といふは善光寺上人尾州勢田村 普願寺上人伊勢宇治慶光院上人

○社家齋藤氏住宅 日南に在り 下総守と号 ○法然上人舊跡 正信坊小あり上人如来系譜乃 時運面の形あり自作の本像

○親鸞聖人舊跡 堂照坊にあり 毎字の号 并小肉付の清齒あり 寺傳小曰兼元は後醍醐人越後

國府之遠流より建暦元年に春勅許なり其後常陸國へ街通る乃

節當の街佛詣堂照坊に街返當此間戸隠へ街系詣の傳

歸風越といふ所小暫く街休の時街手履小路傍に岩等を

採りては文字の形をなす終ひ即其夜堂照坊より毎字の

名辨を授與し多しよ風越の名号ともいひ 建暦元庚辰年三月 上旬は建當の付堂照

坊茅二十一世後阿大蓮 教智比丘の代なり 聖人横曾根正信坊鹿島順信坊と召連ら

は當山如来へ街系詣此時花雲を差上終ふ今にのり親

鸞松といふ傳 本堂正面の太鼓櫃小あり 毎月朔日小神燈あり 聖人肉附の清齒一 堂照坊にあり

七十四歳に街時より便御詠歌一首あり

つ川乃ほ小髪に霜むき一葉落ちよありてや東を阿弥陀伴

まゝ元仁二乙酉年四月十五日街止宿あり 堂照坊茅二十四世空阿大徳 孫童比丘の附代なり

○聖徳太子鏡に御影 浄願坊小あり十六歳 自作の本像なり ○二王門 先年焼失して 礎の残あり 東の方

制札あり 西の方番所あり系詣の諸人坊へ着く者は此所より

案内より本堂より此礎まで長四丁中三間余の敷石其碁盤の面乃

如く是ハ勢洲白子ハ大竹屋何某一寄進ト人是より南大門町後丁
新田町石堂丁ナリ北園街道の順路方々高家軒と継ぐ旅舎多ク
名産牛皮餅銅細工の店多ク其外菓肴飲食器財等富有あり
自由なること支那ノ男女の風俗及び言語迄も東都の意氣あり
て繁昌ハ佛都ト云ヘ一〇善光寺ハ四門四号ト云々有り曰

- 東 光明遍照門 定額山 善光寺
- 南 十方世界門 南命山 無量壽寺
- 西 念佛衆生門 不捨山 淨土寺
- 北 攝取不捨門 比空山 雲上寺

○善光寺市花山とてニテ所あり所謂朝日山 本堂より申の方細目右近といふ

○大嶺山 本堂より西の方より大嶺大内菴と 〇栗田刑部城跡 本堂より八丁辰巳乃

末葉ハ紀州君山奉仕ハ即ち在門といふ 〇横山信濃城跡 本堂より北の方二丁東
字ニ見立前 昆沙門堂此所小あり 近き頃垣外中腋の空堀を埋免茶亭と嘗々
乃大勸進の別荘と嘗々

四宜樓と稱之眺望絶景少ク月雪花の折ハ騷人後ハ宴と俤ハ詩人
賦ハ歌を詠ハ四時壯觀と異ハ先ハあハ風紋を々ハ額ハ文ハり

四宜樓説 仁科索元

大凡四時之風物。山水之佳觀。備諸一處者。蓋鮮
矣。獨於斯樓也。偃蹇營表。而無比鄰。飛檐郭如。空
翠清秧板。百花拂砌。春秋納其芳。夏則涼。冬則温。
西臨二水。堪洗滌心。背安梵王。以擁三寶。朝可披
浴雲迎慧日。夕可出色相送真月。衆禳爲之散。群
禎爲之聚。實維佛都之鎮也。地則爽塏。而四垂坦
坦。遠之連山環匝。林壑杳窈。其間則田園萬井。村
落蕃敷。臨然眼底。望不可極。况復若風色時華。物
象忽換。非可勝說也。然而要之。春宜彩霞。夏宜新
綠。秋宜紅葉。冬宜晴雪。此則所以名樓也。若夫藝
苑之士。登於斯也。或淬筆鋒於墨池。或樹赤幟於
詞壇。蓋如斯文也。優遊之容。會於斯也。或舉瓊觴
以歌月。或舞嬋媛而醉花。蓋暢其情也。雖則志異



曉花ふや
 砂字ら
 けくく
 智備
 崇
 新水

春江補畫



善光寺
 宿驛
 繁花
 茶店
 の圓

善光寺

爲別。其樂一也。是故雅俗日到。而興無盡動則感
 來神往。榮辱皆議。噫。微先哲之誠。誰能憶歸銘曰。
 嶮然高樓。既高且邪。保以佳景。援以四時。
 節物一倡。萬客來熙。幽賞搖情。燕興從思。
 寤歸其主。永昌朕茲。山水貢壽。梵王頌禱。

○善光寺三寺中として四十六坊あり其内衆徒二十一坊ハ

常徳院 教授院 最勝院 常智院 徳壽院 尊勝院 本覺院 玉照院
 世尊院 長養院 常住院 宝勝院 威徳院 良性院 田乗院 福生院 光明院 蓮花院

以上清僧たり又中衆十五坊といふ 堂照坊 堂明坊 行連坊 正智坊
 野村坊 兄部坊 正信坊 淵之坊 向佛坊 白蓮坊 鏡善坊 淨願坊

常田坊 德行坊 隨行坊 以上妻帯たり又妻戸十坊ハ 甚妙坊 正定坊
 壽量坊 常行坊 遍照坊 称名坊 以上清僧之此十坊昔ハ時宗ハ妻帯なり
 林泉坊 蓮池坊 玄證坊 善行坊

今ハ天台少ク清僧と成る黒衣小五条と着以規式小ハ氣色ハ猿衣なり

○寺領 千石余の事小割 内 百石別當大勸進 五十石大本願 淨土宗

百六十八石衆徒二十一院 七十五石中衆十五坊 三十二石妻戸十坊
 百二十石佛供免 大勸進 持り 百二石燈明免 三十六石大工免 大本願上人持り

三百石造營免内 百五十石大勸進持 以上

○本堂詰番昼夜八人宛内。衆徒四人。中衆三人。妻戸一人なり其
 如来形影の寫し清浄文不淨除の守并以火打石等を授く

或老僧の曰むく兵乱の以伝法ハ甲州乃属國と成り武田家より如来
 を甲府に移さる甲府没落の後大岡秀吉公京郊へ移り大佛乃腹籠
 とり終り其後 官家より先規計通リ還堂なり久多ひくより靈
 威迄塔り光耀四方に普く近里遠境乃老若男女貴とく賤となさ
 嶮岨と厭ふに寒暑を凌ぐ歩と運ぶくも靈伴乃武徳形多ク
 又或のつゝ昔如来伝法の伊奈郡に在り時善光の夢小我を當國
 水内郡に移さるる告彦くふ乃く之を素より善光身負へり
 自かに叶ひくは是小依り日國上乃誦訪武井社人下の誦訪春の宮
 の社人曰く秋の末社人 其外北野高島宮本平手和存
 関根七澤穂谷金沢柄沢等社家十五人 今の中衆を以て今地小佛
 守護らるる今ハ如来清浄年越の規式小ハ麻の淨衣を著るるを以て
 ○如来の清浄年男々中衆少く勤心俱ハ堂照坊堂明坊ら此後を以て十三人
 年番少く一人ハ清浄年男 是を堂童 是を勸心例年十二月二の申日迄年越く

其夜并に除夜より正月十五日迄白麻の浄衣袴同くすり物川三鳥智に紋
小當る人より一ヶ年浄衣袴ゆく湯攝妻科武井三社と此三社日糸
飯繩山戸隱山一ヶ月糸なり○翌年は去年男へ今年は堂童子より
送る物あり大根を湯根法根の形を作りて二折小入る候々

○年中行事 ○正月朔日外に刺朝拜といひ規式あり大勧進の名代を始
め三寺中惣出仕是を客と称して勅盃の式ありに取小大根乃塩り菜
れ塩漬二折かり古来より定る議ありて大勧進の名代總々む其のら日
音かり其文句二花開くれば天下みり春方をとる万代のまは安令を
目せこれ足をそり度返して信し堂中の庄配亦令善光宅右例
う清年男真守の振ぬ各退出の付送す出る

○同七日寅乃刻惣出仕して南帳仲大の次小後正會別當浄印文の加持
あり其後小三頭代基と通称足ら武田信玄より法免の由ゆく如来浄酒
を供しその内ちと去年男と甚在佛門と盃事あり

○二季の彼岸曼供會助中 ○二月十五日會式あり ○六月祇園會三十四

あり山車燈籠みひびりく通り美と安やり法圓の ○同晦日盃蘭盆會大鼓雲
糸指人し足と歩く拜まゝ依念大形なり 版納骨堂にを打て大念佛あり ○七月十四日施餼鬼納骨堂に

○十月五日より十四日迄十夜念佛美令の阿弥陀一辨開帳十長作のい御子
の健大勢を大弁辨開月預りたり 同十五日如來正覺日少舎式あり ○十二月朔日より去年男清大
本堂に参籠同日七五三繩張中衆残るは去年男坊中糸余して祝
儀あり赤飯を惣寺中へ配る ○同く七日より十二日まで昼夜列事念
佛施行妻戸をりあき勤行是とトウく念佛とい

○同九日清年男より濁酒の法酒法堂へ献備 ○同十日松を中に祝儀あり
大門町の傳馬役として百姓十人門の餅の松并餅搗は薪牛王杖等依

昨年男の坊へ納る ○同廿日女人禁制ありは餅搗鏡五飾と取昨年
男の内小志めと張置除夜より清堂へとり正月八日下る ○十二日

二乃申の日夜入清年宮に於て如來去年越の規式と忌を五の刻に秘麦
なるに依る其行ひ知る但備物を一尺角に折を小片本三枚を

なり

入と一枚小餅二つ法飯白豆蚕豆炒りてと等口で盛て供し西門へ一膳
 宛借する今日駒ヶ岳本堂より一里 余良の山へ駒弓に宮より神主本馬と持参以
 ほく星をお駒迎へり今日暮六時限定念仏も時の鐘も停止し内人
 拂へば式寅の刻に畢て勤乃鈕鳴を相圖小諸事解以成る○同二十八日
 浄堂煤納持年男奉行兩人少く執行本幣より竹小葉と結び札を注
 連を付く保く後幣と別當所へ懸る○除夜より正月十五日迄持年
 男堂童子淨衣神衣着用浄堂小誦切同十六日に退出○除夜子の刻
 別當所の名代并に三寺中惣出仕用帳法會あり依く元初より開
 帳より浄供銘へ配當あり初拜乃 更忌○除夜より正月十五日迄浄堂其
 外の諸鍵とも堂童子に預りて諸事一人のえうへい○門傍の松
 竹も持年男れ門斗より正月晦日迄其傍縁に二月朔日お駒送りて
 本馬を駒ヶ岳へ送ゆ時持年男れ門斗竹も駒弓に神前より焚捨
 て祭礼あり堂童子に勤足迄なり

○善光寺に七社七橋七井七清水七塚とあり其七社と

△武井神社 妻科神社 湯福神祠 美和神社

加茂明神 佐喜明神 木留明神 此内又ひて善光寺三社と
しりて妻科武井湯福なり

△七橋を 花相橋後町 穢土橋新町 中澤橋 瀨本先橋栗田村あり
七社の境なり

△七井を 狐井腰村 来魔井三ツ家村 無方井西町に西方
寺にあり 有方井大門
町現

△七清水を 箱清水箱清水村
の中在 盃清水岩井堂
小在 濁清水新田町小在
及清水九ノ

有利割清水 柳清水美和村
小在 鳴子清水妻科村
小あり 傾城清水湯屋村
小あり

△七塚を 姫塚市村在熊谷直実の娘に有地
往まの所法号一乗妙道大姉 行人塚栗田村
小在 荊萱塚徳生寺に
在法然上

才 席ヶ塚岩石小流小在大磯の
道女十九女少刺髪 盛長私記卷之三十六小曰又爰に奇特
 なる事あり祐成が妻大磯乃虎つちと髪を利らんとくも墨衣
 袈裟と着く七夫祐成が三七日忌日を迎へく箱根山に別當



叢の
かろふ
けんげんの
実生
うま
聖殿



妻科村
妻科神社 神名式
祭神 建御名方命
八坂斗女命
貞観二庚辰年二月
妻科神 授從五位下
同五癸未年授從五位上
土人妻たりの宮と云
夫木
あふう紀勢中
ゆり乃
つる年
あやとれ
きんか
あん
うま
権僧云朝

たけくときぬる旅路のうら
妻たりの独木のほ
竹葎狂飲併圖

行實坊に於て佛事と修し和事の誦誦文を捧ぐ芦毛馬
一疋を牽き唱導れ施物等とせらる此馬は祐成が寂期の時
虎に咬えらる馬なり乃今日出家を遂げ世國善光寺に赴
く于時歳十九歳と少者縹素熱淚を拭りさるへかり

時丸塚 美和村 伊勢町と新町の境あり越後 柏寄塚 伊勢町と新町の境あり越後 兄弟塚 見前 三門内西
の方に並み足忠信 五輪の古塔あり文字も此小菩提にて多難

○毎朝六ツ時開帳あり○毎日清血脈頂戴しするあり足の前夜旅
宿少く圓所姓名と記し足を洗せ宿より別當所へ十廻をく冥加
やして小紙一折を上系 是ホのゆ宿 借聖朝恒例の開帳も系うてまより
万善堂 別當所の 道場あり の度庭に集り居銘く呼出ある時路次口を入り
水を洗うひ大勧進の内仏の向小相話る其時方丈出く高座あり系頓
戒授與同く満談十念済く念佛の時方丈轉座曲系小懸り清血
脈授らる衆生と行なり頂戴して退散するなり

○善光寺今れ伽藍造營の事 元禄十四辛巳年十二月廿五日より戒善
院慶雲日本廻困少く奉加るし故に普請此儀江戸表より松代慶
山奉行在 作出同十六未年五月十九日江戸大工万兵衛と云者来り材木
積本寄等執斗 但元禄十三庚辰七月廿七日下坪小海より出火の堂并寺中下と
燒失り慶安庚子年再建あり入仏より五十一一年あり

○清堂地割坪敷工敷之事 惣屋根坪敷千五百五十二坪八十三重

- 一 桁行共九間三尺一寸 一 梁行十三間七寸二寸
- 一 桁六間七寸六分 一 出端三間一尺八寸

一 向拜坪敷廿坪餘 一 桁行三間一尺六分八厘
一 脇向拜出端三間一尺八寸六分此坪敷十六十四重八毛

惣地坪合四百三拾五坪九十六毛 但一坪小付三百八十五の積りあり
凡合大二十六万三千六百廿六同手傳二万四千五百三十三

同手傳二万二千五百五十五積木換一人付 但大ユ二人付
二及八ト積 物惣屋根の工料令七百二十兩一及五及八ト
同手傳二及五ト積木換一人付 二及八ト積

過善光寺

南亭

傳聞露像紫磨金。西域飛來利益深。遙兵當年善男女。依然此地市祇林。旭峰雲靄和。鑪氣丹水波濤帶。梵音不是群生同。渴仰公程豈許此攀尋。

伊勢荒木

皇代時代とてこれ我れ宗公をさうや二世の件も

久老

善ひうりきき月又は今宵の半

宗祇

月うもや四内四宗をうりて

芭蕉

遠つぬれられ極樂や布やきん

支考

むく起乃そゆ涼しや堂より紫

慈竹

又後日は蓮臺しりれ志井の那

露川

糸く福ひたさぬ園よりきくてぬ

曾木

山も眠けまればまれば朝法師

盧元

朝よりさらさら志露乃ひうりけ

輝牛

新波のふわりと拾めし佛も今もほほえみよるに寺

蜀山人

我國よみのりれ聲ときくさういし清仏やけり失かる後

利忠

○荊萱堂

寂照院住生寺と云 浄土宗和風院に属す

善光寺如来堂より西八丁山手にあり寺内小親

子地藏并に素逆の松あり東南と曠く見下して風景好き小院あり

此荊萱堂寂照坊等阿法師入皇七十六代近衛院乃所宇筑前国主加藤

左衛門佐重氏同園三笠郡荊萱の莊博多の城より居住なり重氏二

十一歳れ春花の下に帰らむるを忘る酒宴と催し拈奥の折り春乃

山風小蒼ゆめ花一輪落く盆中の浮む重氏法よく是を觀相して

誰う百年を期と人あつむ頻に憂常れ心發り妻子珍寶を厭離し

左所より捨忽然として帝都に赴き敵岳小登り西塔黒谷松

敵空上人にまゝと剃髮しそ等阿法師と号けり時仁平二年

四月二十四日たり爰小筑前箱寄八幡宮れ神託小依り弟弟子

源左に降候し念佛此行者と成り十三年と後高野山小登り

雷錫せり然るに嫡子石堂九母ありと重氏の行末を尋ひ到りけり

とも恩愛と菩提の障りとして母を親子に名乗らうりて故永万元年
石堂九利髪して寂照坊の弟子と成り信生坊道念と号し等阿
傳思へらく親子一山小在てと愛念捨てと正治元年八月中旬
信濃國善光寺にあり今往生寺の境地小草菴とむまび日如來
前小詣一會仏の外又餘念もろりたり或時通夜の爰に等阿法沙
内室柱の前娘千代鶴うづび十里の前善光寺如來とむに六地
菴と称す寂照と地藏の化身なりと中地藏の像を造立して衆生
を化益あえりと告終ひく夢覺ぬ依く地藏并と建立して人
皇八十四代順徳院の御宇建保二年八月二十四日享年八十二歳ありて
往生する其夜高野山ゆく道念法師冥夢と感し父寂照乃今終
物ひたりとて急死善光寺に到りて大法舎を修し等阿自作の地藏を
を拜し道念も同じかたりに地藏并を造立し建保四年七月廿四日生
年六十六ありて往生すと云ふ新置親子地藏といは是なり

○藥山ふんじと藥師 善光寺より二里ほど丑寅の方へ山上の岩穴より
翁の如く木と見え出りてが上小堂と建たり荒木田の久老考の文あり

藥山乃歌并序

久老

信濃の困水内縣小葉山といふ山ありて中ね山ありて切まきる
如き千石は巖殿の中らもおほきれる本を若出りて持れりへり
ひらけをと作りたるその家ありたるこの山岸よりうら橋
た川物をうつてりてりて通ふる免らりの欄よりえおろせば谷深
くつとおほき一やとある谷川と河さ川といふらうつとらる
油い此川意より流き出りぬとの家ありといふき葉師が
つられ石像ありと云ふ久老 致るんらの葉少とゆをいふ少彦
名れ神乃みりるるべりかひゆえに延喜神名式に能登國小大
持乃石像の神社少彦名の石像に神社あり又常陸國に荒磯
崎葉師菩薩の神社ありてあるもかの神ありて像なるり



春江補畫

薬山の約ヶ岳の
山脈より駒形
明神の宮とら
ゆふ友名とい
中山道の
約ヶ岳よ
ついで

山吹の湫
長原乃
温泉

薬山
ぶらんどの
薬師



山吹や
日也
永原の
温泉は
あはれ
中彦

續日本後紀小見くよりされ神の清像を石りて造るため
抄ゆ病をねむ道をしりていより茶師乃名代抄し
奉るものやふをいばわれ薬師とすを守る必との神おれ
ゆにまねひかるる

くこれ神少者名の造り久茶の山にきりきりくを 久老

おの緒乃余のよと茶山なき川流をいむむしてれ 後足

薬山の麓と巡り四丁奥小長系れ温泉あり其下の流を浅川といひ
山吹乃淵といひ西岸に山吹多くある故名ふあふかるる春の末夏
れを先以川色の岩種ふ遊るら愛く酒酌と益かんと流し家移を
忘るを病を治し命と延る仙境のむびるる

いし 久老の日の教を流してまを淵小吹く山吹のむ 茲徹

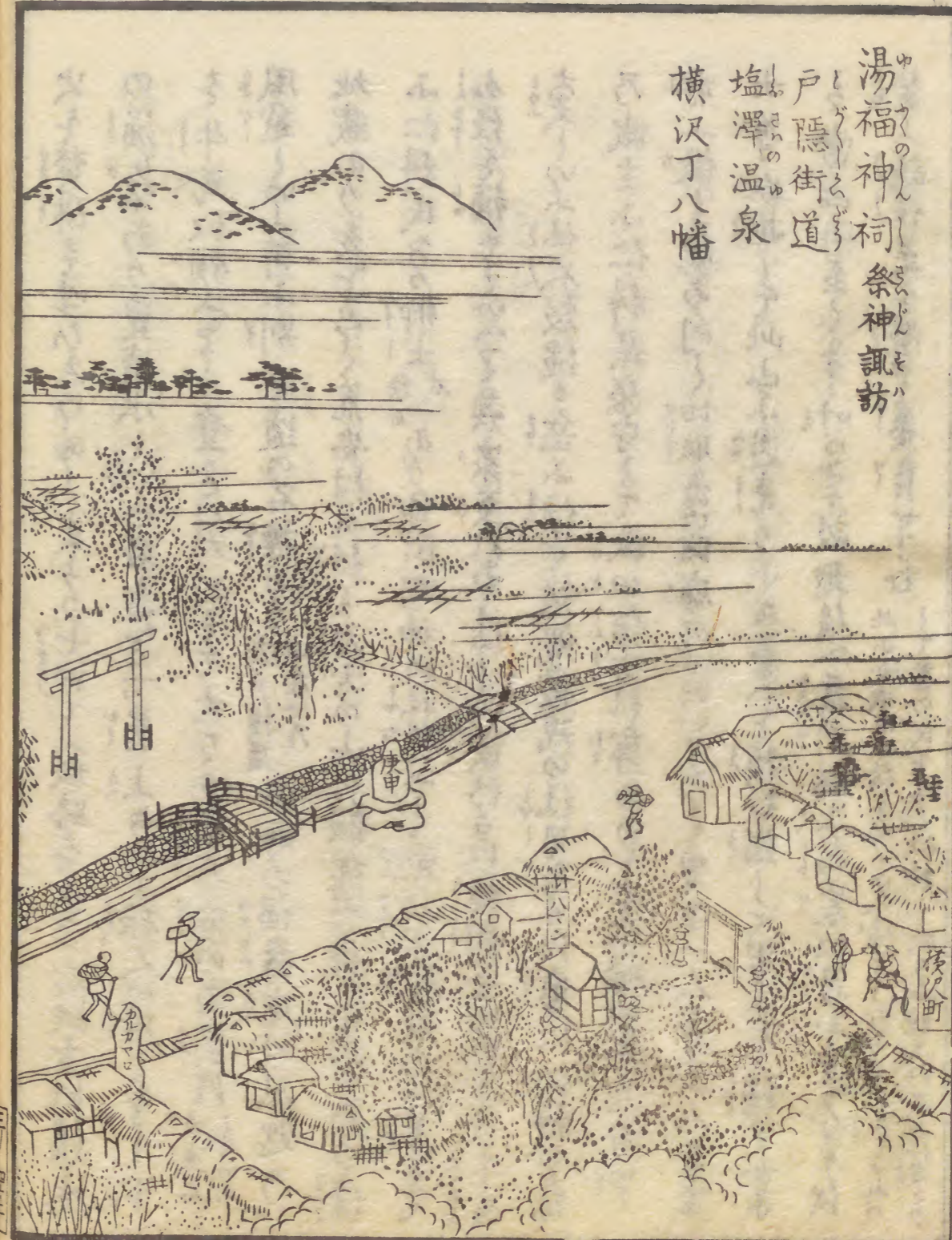
湯福神祠 如來寺の西より 戸隠街道なり是より登の坂路ゆく下より

か先八町堂と塩沢といひ所に温泉あり人家の側は浴室とくゆへ

火を焚佛も味い志りゆりまより七曲て坂路を登る右れ方に清水
の涌出あり豊清水といひ岩舟と二ッ壘上ると旅人の用とたり下
を牛馬に飼ふより登る石とて大なる岩左宮におまは 女夫石
風越といひ所小別と道の石標あり 左戸隠道 右在に乃 此所の福壽庵に風越乃
地藏あり爰とて荒安村小科る右方の山小飯禊明神の里宮あり傍
小仁科氏なる郷士 秩石 あり即ち明神の社勢ゆく勤行の服麻上下着て
お経を誦すとて其家系れあはると関侍に頼朝公の以より千日
太夫といひ仙人飯繩を無小住と飯繩権現の社司たりは粵に仁科の森
乃城主小仁科尾張守とて武田信玄れ舞ありしが永禄四年三月甲
府小徴一故あゆ切腹の城廢るいといと男子一人女子一人を家
士等ぬ抱して此山小遊来り千日太夫を頼む諾して男子を頼む女子
を當山小遊く半叶の故越後へ落り上杉家に召おるまんとり代
此女成長の後を若の関人嫁しむ各家の頼るれば
此女謙信是を勞り養育せむ とて妻の氏を以仁科と改め今藤上杉家小仕女ら



涌物くさ小満豆
 志和澤乃湯福の
 神と交りまうと
 草、庵狂吟併図



湯福神祠 祭神諏訪
 戸隠街道
 塩澤温泉
 横沢丁八幡

其後年月と経く十日大吏甲府小登り信玄乃機嫌を窺ひ罪
 かり小兒一人と吾等が許し申すに益ぬ仁科の家を立揚り
 申しをり信玄いり怨敵乃跡何を致久十日大吏嗣子かれば幸
 ひ書子とらるるなりと振仁科甚十郎と認免朱印を押して是仁
 科の跡に禮授ぞと賜りぬとより十日をあらとめく仁科と
 稱を依之古證文取通を納む

朱印九珍

仁科甚十郎

天正六年

正月廿三日

五拜文し
 奇を申之間
 其油断り念
 申す以上
 酉
 五月十日信玄

飯縄山し事
 朱印九珍
 必父典子前相の時
 不て五お遺り候
 武運長久の行念
 不て致退轉も也
 由出候

弘治三丁巳

三月廿三日

飯縄く
 十日

從中お治法候し事
 波法候し候波候事
 仍り候

丁卯
 乃中大候物事

十月十日
 朱印九珍

飯縄く
 十日らあ及

位別飯縄大明神沙社願し事
 一 致務成費 上折し角 一 志費六百 上座し角
 一 拾費 小端し角 一 志費 小御し角



飯繩の里宮
 同奥の院
 鍋蓋権現
 笠立山
 紐の岑
 仁科氏の宅
 桂山古城



一 壹貫 一拾貫 千田一石
一 壹貫五百 市村一石 已上

新清寄進

一 壹貫三百 入山一石 大文 一七貫 廣徳一石

一 拾貫 五百 南一石 伊井井村 五家梨窪山

右此計後寄進年深一奉衛所為家伊氏運
長久者 作狀如件

元禄元年 庚午年

九月 卯日 朱印 奉正忠奉之

千日次印奉之

定

版繩神領以先高平判法寄附之上自今

已後孫子之通也如遠年先高平判法寄附之紙運
長久之通也如遠年先高平判法寄附之紙運
仍如件

天正八年

閏二月 十日

子日奉之

定

後四官 菅左衛門 九官左衛門 菅左衛門 菅左衛門 菅左衛門
後八 孫左衛門 菅左衛門 菅左衛門 菅左衛門 菅左衛門
菅左衛門 菅左衛門 菅左衛門 菅左衛門 菅左衛門

版繩大明神如旧規本山清延文 後在正不還任
以右右拾七人等由普請役由先許由先文申

後述の如く清涼殿をこの後勤仕り火後
作初志也 仍必件

天正八年

三月十日

御前見書

千日

千日

此外の古書墨之右の古終文と云く今を見るにむろ神領此終文
たる社頭の莊庭から半思ひたるはべし

飯繩大明神祭神と天神第五偶生の神大戸道尊と齋祭本地の太日

如来ありて即不動明王変相やく後らせ給ひ火防隨一の神徳々のつら

いふくあるは衆生濟度の為に地藏菩薩と現ト武門擁護乃為中は

勝軍地藏と現トありその冥感測るべきは縁起下界貝原氏云 是より本岳

奥官に登る 荒安より 慶男れ導伴ゆく家僕小神供此調度ゆび粮服代

取持とせ髻頭蔭面と踏むぐやえ坂を越え入坂をせよ土生れ小丘あり

主の老夫ら髪根服壞く柴の煙算れ水傳心細くも後に慰ひ遠く

登るべだつちちと池 池の中に 巡り飯繩原に於る二十丁を行て嶮

しに坂あり 岩角と足ありとて根等不把了十五丁のぼるは所

小千日屋とて此に平地あり 千日大夫安原 俱利伽羅不動の石像苔

むして腰下ら折れ失くなくその石工の鹿拙なる守古以来の物小非

むこの峭壁不動か境とく清涼なる飛泉あり一が今ら山巔岩峯

てそれ跡を形く但峯岫の溜湫向溪小溢き山腰に七ツ池と成て

おろく号あり東より南西筭き二所謂みのぐやち 大小ニツあり 大池丸

池新池だつちち一のら等あり是より捨丁余のぼるは嶮岨目も

眩くたつちち言柔みも迷ぐく漸く頂子斜る糸籠舎の茶小

く息を續ぎ汗を拭す川東南を眺るに富士峯幽遠ありく和田

嶺ありやたり浅間山も煙るち昇るく同経とそれと知るは千曲

川犀川ら悠くして龍蛇横りる等一其外作き見れ巖崖
ら凄涼と眼下に峙立又西北に顧む戸隠奥嶽の山脈高妻乙
妻剣の峯黒姫山に結と越後れ赤倉山神戸原山鞍骨山後摺
貝摺明光山北八条を群峯威儀を列糸尖峭やして緑雲して
黒く雪まると白く借る佐波の嶋山を登れおちく北海乃陰浪天
を渡して渺々乎

抑る飯繩が岳も既に冷際に至る時たぬ寒風来りて肌と通
雲霧常に朦朧として炭の露として稀くく今鳥也幸ひめで
一天晴明るれば登山して年来の願望を足ぬこれ併る大
山祇社神の擁護且ら天道に助るる人へ幸の幸と得人便神酒と持
燈明を挑け宿務と敬白に扱嶺の内五丁に北東へ根盤を分
藤根盤生茂り結あく麦畑のどく季林いづる毎半里民を為掃り粉能と
香ふに作り合ひ美味して竹の子は香ありとつり
沼田の畔に如く土相りうたり小岩扱る砂系の根盤を分所あり是飯

砂のある所なり上面の砂を掃除く岩の際を歩いて七ひ出せば
飯のゆく粟飯れびく採く飯を係小相りうありて何の香気なく
風味とそりたり腹おえるとして障りく我
さうをか一茶を煮せんと社司に本社司其徒を喝く一握を授けたり
水に浸し煮又煮るなり人々味を志する小みれく奇異乃かひいそなり
實乾坤の間小かる不思議の外おありやいまご不問思ふ小飯
砂れ名に負つるうを世小書傳る飯繩乃文字八常とびや飯砂る
と仁科氏小語まば文字の現る尤もありなりやとく新く言を詢むる
と藥艸多く今小黃蓮の花盛なりまも葡萄の蔓もに纏ひ小
て所々に村山なり花の家の中なり此靈岳三十六の巖窟十八乃谷
あり北裏より雪所々に又白砂あり又天狗の遊場
てい九二百坪もあり人白砂あり碁盤の面れびくは深き小池三
つり今水毎月の央るに厚氷閉く巖れほくも又足すか係靈岳に
遊むる遠く千重の浪とかく崑山乃玉を拾ふありは遠く

むろ 西行上人の國
 遊歴者みきり戸隠ふ
 まわんて板橋原を
 通らまうがこらの侍わ
 児の巖を採石ちるとて
 ワッびあまきまやと
 たふまきひいし六見
 かの木をふてかいらやれそ
 や解んつゝけるまより
 戸隠の月乃街子此
 社頭小橋の巻り
 ありちんが初の子の
 上人を見て此様か
 つくのりりれを西行
 けららどとてるより
 ちやく木よのぼる



と口まらみりりきまば
 太のやうあるは沙きこれ
 やほぢちりる上人かたの
 思ひとけ 是と人な
 けららどとてるより
 あらうめんとて
 是より引返
 安曇郡佐野の
 ろへ通る在明山
 けやわりとてん
 せいし



塩尻

朱子曰天地始想只有水火二者水之滓脚便成地今豈
高望羣山皆為波浪之狀便是水注如此只不知因甚麼
時凝了ハレ語類

予そのくち抄州有馬迹さ大甲山小登り侍一肘友等一傍に俗を補し侍
了らげふの勢い俗のまじりける勢州安徳郡中津郡とて
家の所侍らそに貝石山といふ岩山あり山上れ石の中小石貝ありるを破て
出れ形持し一螺の殻あり裏裏して黒石なり癸巳仲夏成人と
りありてを侍りたるは信法よ少將義行の所侍らふ中に見あり
とえ未定侍りしはのありるまじり始まり茶碗の貝ると一板の物と蓋
大古此等も海中中くしや有つらん朱子乃説を以て視るに海水漸時に退と
軟泥化して硬石と漸りしは貝芥との裏合せられ侍りてると成りて天地
のあり思儀とて侍りしは

善光寺道名所圖會卷之三終

